

---

---

## フランソワ・トロンシャン『絵画に関する講演』について

### ――18世紀ジュネーヴの美術愛好家とフランス語圏ヨーロッパの絵画論の関係

宮崎 匠（日本学術振興会特別研究員）

---

---

18世紀のジュネーヴで評議員を務め、ヴォルテールら思想家と親交があった美術愛好家、フランソワ・トロンシャン（François Tronchin, 1704-1798）が啓蒙期フランス語圏ヨーロッパの画壇において有した重要性は、フランスやジュネーヴの芸術家や美術愛好家との交際、古今のヨーロッパ絵画のコレクターとして博した名声などに明らかである。さらにトロンシャンが1787年および1788年にジュネーヴ芸術協会でを行い、刊行書『絵画に関する講演』（1789年）に収録された講演の内容は、18世紀ヨーロッパ美術研究の文脈でたびたび言及されている。

さてトロンシャンは絵画の様式や鑑賞に関するその講演の中で、同時代の画壇関係者も頻繁に論じた、絵画作品の仕上げの問題を扱っている。だがこの問題に関するトロンシャンの理論の特徴については、彼の友人でジュネーヴ出身の画家、ジャン＝エティエンヌ・リオタール（Jean-Etienne Liotard, 1702-1789）の絵画論からの影響が指摘されているにすぎない。しかし18世紀の画壇関係者の議論を念頭に置きながらトロンシャンの『講演』を精読するなら、彼の理論はリオタールの受け売りにとどまらない内容を持っていること、とりわけフランスの美術愛好家や芸術家たちとの交際を通じて得た知識を活用し、新旧の理論を応用した絵画論をトロンシャンは『講演』の中で展開していることがわかる。

そこで本発表では、このトロンシャンの絵画論の最も特徴的な部分である、作品の「仕上げ」に関する議論の内容が、リオタールの理論との間に共通点だけでなく相違点をも有すること、また同時代のフランスの絵画論から影響を受けつつ形成されていることを、トロンシャン、リオタール、フランスの著者たちのテキストの比較を通して明らかにする。特に発表では、どのような種類の作品においても入念な仕上げを要求するリオタールとは異なり、トロンシャンはフランスの理論家たちと同様に、①適切な仕上げを実現するためには作品に過度に手を加えないこと、また②鑑賞者と作品との間に取られる距離に応じて仕上げの程度を調整することを芸術家たちに要求しており、さらに③寒冷的な気候に培われたオランダの画家の我慢強さが、絵画作品における入念な仕上げの実現を可能にしたとする例を挙げながら、気候が芸術家の気質や作品様式の決定要因となるとする、同時代のフランスでも知られていたヴィンケルマンの芸術論にも通じる主張を展開していることを論じる。

以上の議論を通して本発表では、フランス語圏ヨーロッパの画壇に豊富な人脈を持つトロンシャンが18世紀後半に形成した絵画論は、同郷の画家リオタールの議論と、当時のフランスに浸透していた伝統的、あるいは最新の絵画論を複合的・選択的に受容し発展させた結果であることを指摘し、啓蒙期フランス語圏絵画論のジュネーヴにおける特徴的展開の様態を明らかにすることを目指す。